

## 巻頭言

グローバル人材育成教育学会 関東支部長 加藤 俊一

### グローバル人材育成と英語教育の接点

本学会が設立されて5年が経ちました。その間に教育や企業の人材育成の現場では、「グローバル人材像」のイメージを明確にしつつ、様々な先進的な人材育成の取り組みが進められ、また、大きな広がりを見せています。特に学校教育の場面では、初等中等教育と大学教育の連携を図る中に、グローバル人材育成が重要な柱として位置づけられ、それは大学入試改革にも反映されつつあります。

今年の関東支部大会では、グローバル人材育成において英語教育がどのような役割を果たすべきか、本学会設立の「志」を振り返りつつ、入試改革と学校教育の将来像、学校教育への提言について、密度の高い議論を得ることができました。

初めに独立行政法人大学入試センター審議役の大杉住子氏より、「大学共通テスト導入の背景と現状」として、高大接続教育の必要性、大学教育・高校教育・大学入学試験改革などの背景のもと、外国語試験（英語試験）の位置づけについてお話を戴きました。次いで、外部英語4技能試験を提供する7機関から、各試験の概要をご紹介戴きました。

シンポジウムⅠ「2020年からの大学入試改革の課題 - 英語4技能試験の導入の影響 -」は、勝又美智雄氏（国際教養大学名誉教授）をモデレータに、高校側から4技能の育成に力を入れた教育を進める事例の紹介、一方、大学側からは多数の学生には基本的なコミュニケーション力の習得が十分ではないことも指摘されました。当日、飛入りで参加をお願いした安河内哲也氏（実用英語推進機構代表理事、東進ハイスクールのカリスマ英語講師）からは、教員の側が学習指導要領に縛られ過ぎず、子供たちの知的好奇心を刺激する教育こそ重要とのご意見も戴きました。

シンポジウムⅡ「グローバル人材育成 - 教育現場への提言 -」は、大六野耕作氏（明治大学副学長）をモデレータに、メディア・教育・人材育成の分野でグローバルな環境でお仕事されている方々をパネリストに迎えて行われました。討論では、グローバル人材像のイメージを揃えつつ、大学教育でどのような教育・学びの経験を与えるべきかが議論されました。その中で、ALやPBLなどの手法を、グローバル教育の目的と取り違える教育現場も少なくないことも指摘されました。英語を習得すること・英語教育は、グローバル人材にとって必要なスキル（手段）ではあるが、その向こうにある「相互理解のために何を伝えるのか・どう伝えるのか」が重要であることが合意されました。これは支部大会全体の結論でもあったように感じています。

これからの学校教育では、グローバルコミュニケーションのLingua Francaとなった英語の教育はもとより、グローバルスタンダードになりつつある新しい形態での授業（対話的授業、反転学習、Active Learning、PBL、グループワーク等）を、英語でリード・運営するスキルを、教員・指導者自身が習得することが求められます。そのためには、教員・指導者の側が持つべきグローバル教育コンピテンシーを明らかにする必要があります。本学会にそのような研究・議論の場を持ちたいと思っています。

（中央大学 理工学部 加藤 俊一）